

# 仕事人秘録

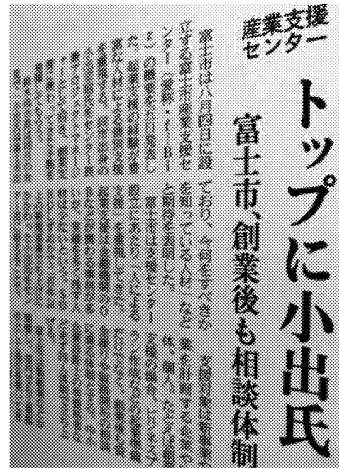
2007年末、出身地である静岡県富士市から面会の申し入れを受け

「相談したいことがありますので時間をもらえませんか」。私が今働いている浜松市ではどこことなく具合が悪いような気がしたので静岡市のホテルで話を聞くことになりました。「地域活性化のために新たな中小企業支援施設をつくらうと思います」と富士市の職員が話されました。富士市は高度成長期には大手企業の工場が立ち並び繁栄しましたが、産業構造の変化に乗り遅れていたのです。

## 行列のできる経営相談所 ⑬

富士市産業支援センター長

小出 宗昭氏



富士市の産業支援センターの設立を伝える日経新聞 (2008年6月6日)

## 故郷へ49歳の再出発

んの言葉です。怒られた。ただ、まだ浜松の仕事と思つてました。神谷聡一郎最高顧問にも話をすると「静銀にとつても光栄なことだ。うちの行員が1つの自治体の産業支援を担うんだろ。やってみなさい」。尊敬するお二人が私の考えを酌みとつてくださったのです。ただ、直属の上司からは大目玉を食らいました。「話す順番が違つたら」。でも、こつしたことは

6月末、退職の挨拶のために中西頭取に時間を取ってもらいました。「頭取は駅伝のランナーだ。必ず次にバトンタッチをする。でも起業家はずっと走り続けたいという気持ちがないマラソンランナーだ。小出。だから頑張れ」。この言葉は私の励みになりました。

業務開始は8月4日。バタバタの追い込み作業が始まります。短かくとも充実した浜松での仕事のことか思い出されてきました。

事を始めてまだ半年ほどしかたつていません。静岡銀行員として出向の身です。「希望には添えません」とお断りをいれました。しかし何度も「富士市で働いて下さい」と懇願されました。年が明けると市長の鈴木尚さんとも会うことになりました。もう自分の一存では断れないと思ひ、静岡銀行頭取の中西

上話をしないと思つていました。退職の日は6月末。49歳になったばかりだ。中西頭取から温かい励ましの言葉をかけてもらつた。浜松での仕事を途中で投げ出す形になりますから心苦しかったです。一方で新しいチャレンジができるというワクワク感もありまし